

【絢爛聖典】  
漏刻鏡論注解聖獸義

薔薇王

太陽日輪は金の船

太陰月輪は銀の船

旅する靈カア

星めぐる心ヌース

「リウジトウチビドンニンチガツゴヨウバン立世阿毘曇論日月行品」を巻きおさめて、シヨウロン学僧星雲は四大元素に心をこめて、アストロラーベで星を覗いていた。ふと華鬘ハナカザリのごとき星座の中より落つる一条の光あり。誰か宇宙の幾何学を乱す者ぞ？隕石？いな、全身は火焰に包まれ、人面にして物言ひ奇獸、フウェン島のウラニボル天文台で「アル・フラーフ」と記録されしカイチ解多であった。解多の尾、五十に分裂し、たちまちその姿は五十に変じて、月の岩山に並ぶ。そこは羅羅族ララの土地である。遊牧の羅羅族、トウコ樽瓶を飼って北辺をさまよひ、からすむぎに似た貧弱な植物ボボヴェルを、破巾着と海星の合いの子のような鈍重な獸、樽瓶に食わせ、そ

の乳を飲んで生きていた。突厥河がどうしようと、北へ流れて千余里。

——解多？……

学僧星雲は地球の金輪に下った聖獣の名を呟きながら、紅蓮に乗った日天と青蓮に乗った月天の小さな絵姿をさわらびのように巻いた模様飾った卓上の厨子の蓋をひらいて、金襴の卷子本の聖典をしまった。

阿はアルバにして劫初の相

咩はオメガにして終焉の相

——内的清澄は水のように、黄金のように、エメラルドのように、東方の動かざるものを、南方の宝石の誕生を……

密呪を唱えながら星雲の瞑目した水晶体にうかぶのは彼自身の臍輪など五つの円環、そして地球の金輪、一番最後に凜然ときらめくオリハルコンの宇宙薔薇の回転である。……

——解多？……

星雲は、何の寓意を感じたのか、かつて金泥の剝けた詩絵の匣に、生きた海星を棲まわせていたことを想い出している。水の波光にゆら

ゆらと漂う棘皮動物、ぶよぶよした管足の先に吸盤をもった小動物を彼は愛して、エレアザールという名をあたえ、それが死んだ時には悲しんだ——聖なるかな、海星の心は水の寂光ヨシクに棲む聖海星菩薩尊におわします。

日輪は紅き焰

月輪は青き焰

海星のチャクラは水の寂光

氷のうかぶ海の岸で、一頭の樽杓がゆっくりとポボヴェル草をばんでいる。すると必ず付近の断崖で、羅羅族の美少年が角目鳥を焼いている。そして荒れた岩の上では雪鼻が首をかしげて「宇宙……字とは異所にわたるなり、宙とよとは異時にわたるなり、ほろろ、ほろほろ」などと歌をうたう。千頭の樽杓がポボヴェル草をはんでいると、千人の羅羅族の美少年が千羽の角目鳥を焼いている。そして千羽の雪鼻。……

「小さき大いなる角」という名の河の畔で、羅羅族は悪しき猿狖

族と戦った。

「赤き雲」、「小さき鴉」、「黒き鍋」、そして「ふさ 伏せる櫓机」という名の勇猛な戦士たちは、兇狃族とその悪神たちを河の畔で破った。天馬の姿をした夜叉が殺され、翼を焼かれた。しかし、後にも先にも、これがただ一度の羅羅族の勝利だった。北に追われてその数も五十人に減り、星に乗った獬豸が彼等に聖言をもたらすまでは。

五十に分裂した獬豸は、五十人の羅羅族を背に乗せた。わけでも無くセラフの顔をせし獬豸の主は、笛吹きの少女を名ざして自分の背に乗せしという。少女が手にした細い銀の槍、ジャーティーの香木で作った、彼女の指よりも細い金塗りの竿には、ふさ飾りのついた、不思議な文字をしるした金襴の幡がひるがえった。その文字は、オベリスクの文字でも、バビロニアの楔形文字でもなく、また、西蔵国の聖なる文字やカタイの皇帝が掟をしるした龍骨文字でもなかった。もっとも太古、海底に沈んだムーの神官が黄金よりもエメラルドよりも聖く貴いオリハルコンの板にしるした神聖文字だった。

獬豸をしたがえた羅羅族の聖戦のありさまは、聖典の異文に書かれている通りである。

羅羅族の笛さえあれば

井戸は海となり

千の夜叉の部族が草のように滅びた

羅羅族の桃の夾をなげつけると

天から星の数ほど鈴が落ちた

すなわち、四臂で兇悪な相貌の夜叉、多足のまた一本足の夜叉、頭に足のある、また頭が四つある夜叉、独眼、三つ眼の夜叉、ガルダ鳥の姿の夜叉、マカラ魚の姿の夜叉、大腹、象耳、垂れ耳、無耳、長耳の夜叉、長鼻、長手の夜叉らが滅ぼされた。

羅羅族の少女は彌多の主と結婚して、大草原と南に連なる森と湖北に連なる海洋と島々を統治する「至高少女」となった。羅羅族の四十九人は「聖牧者長老」として少女と彌多の主任せ、傳いた。神学、天文学、詩学の学匠ら、舞踊、音楽の達人らが三千余国から集まり、八千人の僧侶がジャーツハの密呪を合唱し、四方の魔神を敵った。僧星雲もそのなかの一人だった。

ジャーツハ、ジャーツハ、ジャーツハ

ジャーツハ、ジャーツハ、ジャーツハ

ジャーツハ、ジャーツハ、ジャーツハ

聖なる夫妻がマンダラの姿勢をとって坐す天幕の周囲にはヒドラ型の櫛の花が色鮮かに咲き乱れた。香華や燈火の供物が円壇の前に並ぶ。

左右二人、寸分違わぬ同装束の舞人が鈴を振って、作法正しく歌舞の儀をなす。雲や鳥の形を宝珠形の火焰が囲んだ飾りのついた大太鼓が鳴る。舞人らの瑰奇な仮面は極彩色に塗られ、衣裳には天体氣象や植物の文様が刺繡されている。……

しかし、時をへて衰亡した羅羅族は、聖典をおろそかにし、悪しき繁栄に身を委ね、火天の靈的所在である盤惑の怒りをかかった。ムーの聖なる文字で覚者の愛にみちた言葉をしるしたダマスク織の絨毯を壁に幾重にもはりめぐらした宮殿は炎に包まれ、廃墟に動かぬ時計が残った。羅羅族は森の奥に逃げ、ヒドラ型の櫛の花の根に寄生して生きながらえる葦人間になってしまったという。

ただ一人、至高少女すなわち聖獣の主のシャクティだけはただしい董色の眼のひとであったので、非妥協的に愛の言葉を守り、懈らにまたがって月の岩山の彼方に去った。セラフと少女はその言葉で

会話をするし、その言葉で世界を解釈しているので決して減びることがない。

この世にただ一人残る癡癡教僧星雲は、R区G町の閑静な界限にある、ホイヘンスの惑星振子時計と飛行船ツェッペリン号の模型を置いた彼の秘密のシアベルで、世にも珍しい「漏刻鏡論全釈」なる宗門上の著作を執筆していたが、病と老衰のため同地にて先年没した。未完の大著は故人生前の意思によって火中に投ぜられたが、僅かに難をまぬがれて残存せる断簡若干が余すなわち薔薇王の手に入った。

